

令和 5 年 5 月 9 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13082

研究課題名（和文）平安時代日記文学の生成・受容実態についての研究

研究課題名（英文）Research on the generation and reception of Heian period diary literature

研究代表者

岡田 貴憲（Okada, Takanori）

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：60822103

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、平安時代日記文学のうち『和泉式部日記』『更級日記』『蜻蛉日記』の三作品を主な対象として取り上げ、特に中世以降の受容に関する問題点から、以下の三点についての成果を得た。(1)諸本の悉皆調査に基づき、新出伝本を発見し、伝本系統の再構築を行った。(2)板本における古態本文の残存を示し、かつ周辺資料に基づく散逸板本の推定を行った。(3)国学者による伝本受容の実態を解明し、それを支えた人的交流の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の日記文学研究が、作者の自照性を重んずることで研究価値を見出だした草創期の事情から、特定の「善本」（作者の原作本に最も近い一本）に基づく作品内容の考究を常に志向してきたのに対し、本研究では、同事情から必然的に等閑視されてきた近世以前の受容に着目し、「日記文学」というジャンルが定められる以前の諸作品の姿に迫る成果を上げた点に、学術的意義を有する。近代より続いてきた日記文学研究が今日陥る停滞状況に対し、「日記文学」の枠組みを離れることで諸資料の活用可能性を示した本研究の成果は、長く教育現場においても固定化している中古文学のジャンル意識に、変革をもたらすものとして社会的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：In this study, I mainly focused on the three Heian period diary literature, "Izumi Shikibu Diary", "Sarashina Diary", and "Kagerou Diary", and obtained the following three results concerning the reception after the Kamakura period. (1)Based on a thorough investigation of various manuscripts, I discovered new manuscripts and reconstructed the lineage of the manuscripts. (2)I showed the survival of the ancient texts in the woodprints and presumed the dissipative woodcuts based on the surrounding materials. (3) I clarified the actual state of acceptance of the original text by Japanese scholars in Edo period, and clarified a part of the human exchange that supported it.

研究分野：中古文学

キーワード：日記文学 和泉式部日記 更級日記 蜻蛉日記 写本・板本 本文 受容

## 1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とする「平安時代日記文学」は、平安時代に平仮名で記述された、「日記」の表題を冠する散文作品群を総称したものである(以下、便宜のため日記文学と称する)。

日記文学は、同時代に生み出された物語文学とは異なり、近世以前の学問の系譜をほとんど持たず、大正年間に入って垣内[1923]が「自照の文学」と定義したことでその文学的価値を認められ、ようやく研究の緒に就いた。続く久松[1927]、池田[1927]は垣内の影響下に「日記文学」というジャンルを創案し、男性官人による漢文日記との差異(女性性、自照性)に注目することで、現在に続く研究の基礎を築いた。

初期には、日記を「事実の記録」と把握した玉井[1945]に導かれ、作者の実人生に迫ることを目的としたが、やがて秋山[1965]らによって作品の内包する主題性・虚構性が見出され、そこに「作者の精神の軌跡」を捉える立場が主流となった日記文学研究は、昭和中期～後期に隆盛期を迎えた。昭和末期以降、方法の爛熟に伴い、『源氏物語』研究の動向に触発されたテキスト論が導入され、それまで作者と不可分の関係にあった日記文学を、歴史的な脈から離れて解析する土方[1986]等の論が現れたが、その有効性をめぐっては是非が分かれ、結果、方法論の更新がなされることなく、日記文学研究は停滞の一途を辿ってきた。

こうした従来の日記文学研究は、作者の自照性を重んずることで研究価値を見出した草創期の事情から、特定の「善本」(作者の原作本に最も近い一本)に基づく、作品内容の考究を常に志向してきたが、同事情によって必然的に等閑視されてきたのが、近世以前の受容という問題である。受容の中核となる伝本に関しては一定の整理がなされているが、いずれも原型本再建のための系統構築に留まる。この現況は受容研究の発展めざましい物語文学と対照的であり、仮名文学内での相互関係を考えるに際して、近接ジャンル間での著しい不均衡を解消することが優先課題としてあった。また日記文学の生成に関しても、女性性・自照性を自明の前提とする旧来の先入観に対して吉野2018 等の異議が出ており、その実情を根本から考え直す必要があった。

### 参考文献

- 垣内[1923] 垣内松三「自照の文学」(『講座』1月創刊号、1923/1)  
久松[1927] 久松潜一「日記文学と女性」(『日本文学連講 第一期』中興館、1927)  
池田[1927] 池田亀鑑『宮廷女流日記文学』(至文堂、1927)  
玉井[1945] 玉井幸助『日記文学概説』(目黒書店、1945)  
秋山[1965] 秋山虔「古代における日記文学の展開」(『国文学』10-14、1965/12)  
土方[1986] 土方洋一「日記の眼・日記の時」(『鶴見大学紀要』23、1986/3)  
吉野[2018] 吉野瑞恵「女性が書くとき」(『国語と国文学』95-5、2018/5)

## 2. 研究の目的

これまで等閑視や先入観に晒されてきた日記文学の生成・受容は、ほぼ未開の研究領域と言ってよく、その実態への疑問、即ち「日記文学というジャンルが生まれる前、それらの作品は人々にどう認識されてきたのか?」という問いが、本研究の核心を成している。そこで本研究は、日記文学というジャンルの解体と、現在そのジャンル下にある作品群の文学史への再定位に向けて行う基礎的研究として、各作品の中古における生成、そして近世にかけての受容の実態を系統的に解明することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究では、日記文学の生成・受容の時代区分に応じて、以下の四点を課題として設け、それぞれを並行的に解明してゆく中で、特に進展の見込まれた課題へ重点的に取り組む方法を採用した。

- (1)課題A：中古の漢文日記と仮名文学を原動力とする、作品生成のメカニズム
- (2)課題B：中古～中世における異本作成の意義と、その内包する本文世界
- (3)課題C：中世～近世の伝本の書承関係、およびそれを支える公家・大名の交流関係
- (4)課題D：近世における板本作成の背景と、作品を収める叢書の編纂・流布の過程

## 4. 研究成果

当初計画では日記文学の諸作品について広く視野に入れていたが、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う資料調査の制限により、『土佐日記』『紫式部日記』については着手が困難となったため、『和泉式部日記』『更級日記』『蜻蛉日記』の三作品による成果が主となった。また、四点の課題のうち、特に課題C・Dについての多くの検討要素が見出されたため、生成に関する

課題Aの比重は大幅に引き下げ、受容の問題に研究の重点を置くこととなった。以下、研究対象ごとに内容を記述し、上記課題との対応について付記する。

(1) 日記文学全般

平安時代物語・日記文学における感染症をめぐる描写について博捜し、『枕草子』や『栄花物語』にみられる「世の中騒がし」という表現が、いわゆる作り物語にも全く同様に用いられ、かつその場面形成が現実の感染症記録に取材している可能性のあることを指摘した(課題A)。近世後期の国学者である横山由清の、平安仮名日記に関する書写活動に着目し、書写に際する周辺人物蔵書の借覧・入手経路についての考察を行った。その結果、活動の背後には師である井上文雄の介在が想定され、文雄と交流のあった岸本由豆流との面識を経て、その子・由豆伎と由清が交流していたことが分かった。また由豆流と同じ村田春海門である清水浜臣を経て、文雄が橘守部とも面識を得ていたことから、その守部に師事した日下田足穂との関係により、由清の書写活動が行われたことを推定した(課題C・課題D)。

(2) 『和泉式部日記』 関連

作中十月条にみられる「情けなからず」という表現の解釈に際し、五月条において寛元本・応永本系統にみられる異文「情けなからじ」を参照することで、三条西家本に依拠する従来の注釈が是正されることを示し、寛元本・応永本『和泉式部物語』の表現世界が作品読解に有用となることを明らかにした(課題B)。

近世初期～中期に刊行された絵入板本の国内外における残存状況を広く調査し、その板種が寛文板本・享保板本・相板本の三種に整理されることを指摘した。そして先行研究で指摘されていた無刊記板本が目録内容の誤認である可能性に触れ、旧来の見解を是正するとともに、板本と同系統に属する享禄奥書本系の写本に対する、絵入板本の本文の一部優位性を指摘し、本文の祖型を探る上での絵入板本の役割を定めた(課題C・課題D)。

(3) 『更級日記』 関連

諸本の悉皆調査に基づき、特に御物本(藤原定家筆)に由来する巻末勅物の本文異同に着目し、御物本の直接の写しである住吉本を除く現存写本すべてが、一次共通祖本に遡ることを推定した。また、その後の二次共通祖本、および系統分岐点となるX本・Y本までが、鎌倉期書写と推定される小汀本の成立以前に考えられることから、『更級日記』の本文変容が従来言われる近世期の所為ではなく、鎌倉期に発生した結果の継承であることを明らかにした。なおこれと関連して、従来は所在不明の不二文庫本のみが知られていた小汀本系の伝本として、新たに徳島県立図書館本が存在することを確認した(課題B・課題C)。

近世期の叢書である『扶桑拾葉集』『群書類従』への所収本とその前後に位置する板本の本文系統関係を考察し、各段階の本文校訂の様態から、現在は確認できない複数種の写本が周辺に存在していたこと、そしてその一部は古く鎌倉期まで遡る系統にあることを確認した(課題D)。

近世期の国学者から「古本(あるいは異本)」と呼称されて広く受容されるも、現在は完全に散逸した伝本の淵源を明らかにするべく、「古本」由来の書き入れを存する現存伝本およそ20種の分析を行った。その結果、これらの現存伝本は大きく三つの系統に分かれる派生関係として纏められ、その淵源は当時江戸・大坂でそれぞれ入手することのできた非現存板本に遡ることを推定した(課題D)。

(4) 『蜻蛉日記』 関連

国文学研究資料館の新収資料である臼田本(近世期写本)の本文調査を行った。同伝本は、上巻の全体、および中下巻の各中途までを合わせて一冊とする特異な形態をもち、各巻がそれぞれ異なる本文系統に属すると考えられるが、とりわけ上巻相当部分の本文については、従来知られている系統の傾向には当てはまらない、独自の脱文傾向があることが確認された。これにより、臼田本(上巻部分)が、古本系伝本のうち吉田本・山脇本のみが知られていたC系統に属することを明らかにするとともに、同本がC系統のより上位に位置することを明らかにした(課題C)。

本研究では、対象とした三作品について新出伝本を見出だしたほか、既出の伝本についても伝本系統上の位置関係に再考の余地が多いことを示した。またそれらの伝本中には、特に近世における受容の痕跡が、これまで看過されたまま残存していることも明らかになり、日記文学の諸資料を手がかりとした近世期の学問体系解明が、今後の展望として拓かれた。

なお以上の成果に基づき本研究で公表した成果物は、論文八件(うち査読付き論文五件)、および口頭発表一件である。また本研究の成果を、それ以前までに取り組んできた関係課題の成果とともに総括し、次期研究計画の基盤とする目的から、単著『平安仮名日記本文考』を2023年度中に刊行する予定であり、すでに科学研究費補助金・研究成果公開促進費(学術図書)による刊行助成を受けることが決定している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岡田貴憲	4. 巻 159
2. 論文標題 横山由清と平安仮名日記：日下田足穂からの蔵書継承の可能性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヒブリア	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田貴憲	4. 巻 22
2. 論文標題 『和泉式部日記』異本の様相：「情けなからず」の解釈をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 42-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田貴憲	4. 巻 90-8
2. 論文標題 古本『更級日記』と国学者の系譜	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田貴憲	4. 巻 132
2. 論文標題 『蜻蛉日記』残欠本小考：碧洋白田甚五郎文庫本の位置	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語文研究	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田貴憲	4. 巻 -
2. 論文標題 平安時代物語・日記文学と感染症：虚構による「神業」の昇華	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ロバート キャンベル編『日本古典と感染症（角川ソフィア文庫）』	6. 最初と最後の頁 49-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田貴憲	4. 巻 46
2. 論文標題 『和泉式部物語』絵入り板本考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国文学研究資料館紀要 文学研究篇	6. 最初と最後の頁 41-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡田貴憲	4. 巻 155
2. 論文標題 『更級日記』近世期本文の伝流	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語国文研究	6. 最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田貴憲	4. 巻 120-5
2. 論文標題 木村正辞筆本『和泉式部物語』とその周辺：横山由清との交流から黒川本の伝来へ及び	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡田貴憲
2. 発表標題 音無本『更級日記』考：本文校合における古本関係伝本の利用
3. 学会等名 西日本国語国文学会第72回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岡田貴憲	4. 発行年 2023年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 370
3. 書名 平安仮名日記本文考	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------